様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：14301
研究種目：若手研究（S）
研究期間：2007 ～ 2011
課題番号：19672002
研究課題名（和文） 養育者－子ども間相互行為における責任の文化的形成

研究課題名（英文） Cultural formation of responsibility in caregiver-child interactions

研究代表者
高田 明（TAKADA AKIRA）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：70378826

研究成果の概要（和文）：本研究では，相互行為における応答の力が基礎となり，子どもと養育者の双方が責任を徐々に発達させると考えて，責任が文化的に形成される仕組みを探求した．具体的には，(1)乳児の規則性を用いた行動の相互調整，(2)初期音声コミュニケーションにおける音楽性，(3)乳幼児によるエージェンシーの表示と解釈，(4)相互行為としての模倣活動という４つの研究テーマについて，さまざまな文化的集団（日本，アジア・アフリカの諸民族，米国など）におけるデータの収集・分析を行った．

研究成果の概要（英文）：This study clarified the system by which responsibility is formed culturally, based on our concept that both child and caretaker develop responsibility gradually, according to their ability to respond during interactions. Specifically, we collected data from various cultural groups, including those in Japan, Asia, Africa, and the United States, and analyzed the data from the following four perspectives: (1)Reciprocal accommodation of contingent behaviors capitalizing on infant regularities, (2)Musicality in early vocal communication, (3)Displaying and reading agency by young children, (4)Sequential organization of imitation activity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	10,600,000	3,180,000	13,780,000
2008 年度	9,600,000	2,880,000	12,480,000
2009 年度	10,100,000	3,030,000	13,130,000
2010 年度	9,700,000	2,910,000	12,610,000
2011 年度	10,400,000	3,120,000	13,520,000
総　計	50,400,000	15,120,000	65,520,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学，文化人類学・民俗学
キーワード：反射，責任，社会化，模倣，文化学習

１．研究開始当初の背景

近年，社会への影響力を増している発達研究(e.g. Kaye,1982; Tomasello,1999)は，次のような発達観を描いてきた．乳児はさまざまな生得的能力を備えて生まれ，その直後から養育者と相互に行動を調整していく．模倣が可能になる頃からはその社会で育まれてきた文化を学習し始める．

だがこうした発達観は実のところ，極めて限定された時代・地域の研究から導かれてい

る．そこで代表者は，南部アフリカの「狩猟採集民」サンを対象とし，養育者と乳児の相互行為の発達について研究してきた．

２．研究の目的

本研究の目的は，相互行為における応答の力が基礎となり，子どもと養育者の双方が責任を徐々に発達させると考えて，責任が文化的に形成される仕組みを探求することである．

３．研究の方法

上記の目的に迫るために，(1)乳児の規則性を用いた行動の相互調整，(2)初期音声コミュニケーションにおける音楽性，(3)乳幼児によるエージェンシーの表示と解釈，(4)相互行為としての模倣活動という４つの研究項目における文化の位置づけについて検討を行う．

４．研究成果

2007 年度から 2011 年度まで，日本国内において乳幼児がいる 18 軒の家庭を定期的に訪問し，養育者－乳幼児間の身体的相互行為，初期音声コミュニケーション，やりとり活動，模倣活動に関する動画資料を収集した．また米国及びアジア・アフリカ諸国でも上記に対応する動画資料の収集を行った．これまでの分析から以下のパースペクティブが得られた．

近年の赤ちゃん研究は，母子間相互行為を社会システムが形成される過程だと見ている(Kaye,1982; Tomasello,1999)．ここでいう社会システムは，個々のメンバーが相手の行動を予期できることおよび共通の目的をもつことを要件としている．この要件を満たし，社会システムに参加できるようになって初めて，子どもはその社会で育まれてきた文化を学習し始める．

だが私たちの調査データによれば，乳児が他者の意図を理解するずっと以前から養育者は乳児をその文化に特徴的な活動の枠組みに巻き込もうとしている．乳児は近接する文脈に応答し，その参与形式は日々質的に変化していく．この見方をとれば，文化は（近年の赤ちゃん研究が仮定するような）心の中に構築されるシステムではなく，子供と他者が協働して社会的な意味を実現する，行為の組織だといえる．そして実際の乳児を含む相互行為の分析を進めていくことで，赤ちゃん研究の主要な課題の１つとして文化にまつわる考察を位置づけるとともに，これまで行為と意味の問題を扱ってきた人類学，社会学，言語学などに近年の赤ちゃん研究の成果を接合することが可能になる．

上述のパースペクティブを得て，代表者と研究協力者との協働のもとで研究を行ってきた．以下にこうした研究の例をあげる．

(1)乳幼児の意図的コミュニケーション能力の発達において重要な契機となる共同注意と社会的参照について相互行為論的な分析を行った．その結果，初期の共同注意と社会的参照が成立するためには，社会的相互行為の時間的な連鎖関係及び情動表出時の環境との関わりが重要であることが示された．

(2)複数の実験的研究から，養育者－乳児間相互行為が発達するにつれて，養育者は乳児音声に対して聴覚的な感受性を変容させ，応答性を向上させることを示した．さらに発達初期にみられる，自らの音声を探索する「ひとり遊び」発声が音楽性の原初的段階として位置づけられることが示唆された．

(3)双方向のやりとり活動を可能にする条件には，①共同化された行為の協応，②連鎖のイニシアティブの知覚，③多人数による養育者－乳幼児間相互行為における意味のトライアンギュレーション，④相互行為におけるテリトリー性の理解などがあることを示した．さまざまな文化の子どもは対面的な相互行為に直面する時，これらを資源として相互理解を達成する．これが相互行為の参与者が行為の意味を交渉する基盤となり，こうした意味の交渉の歴史の上にシステムとしての家族が成り立つことが示唆される．

(4)成人の文法や「心の理論」の獲得以前とされる幼児でも，母親とのやりとりにおいて，自分の発言が誤解されていることに気づいて修正するという複雑な行為が可能であることが示された．こうした事例の分析を蓄積することで，相互理解の発達と相互行為能力の発現・発達の関係を経験的に明らかにすることができる．

(5)相互行為の発達過程における記憶の働きについて以下が明らかになった．子どもたちの記憶は，初めは行為連鎖に埋め込まれた身体的なものである．その後，行為が記憶によって生みだされるメカニズムがこれに重なる．同時に，相互行為の流れの中で起動する予期の範囲は次第に拡がっていく．これを反映して，相互行為の流れの乱れに対する応答は感覚運動シェマの繰り返しから，他者による次の行為を見ながら待つ，文化的に許容されうる行為を創発的に展開するといったものに変化する．こうした過程を通じて，子どもたちは世代を超えて文化的に特異な活動

を継承，再創造することが可能になる．

(6)前言語期における身ぶり，とくに指さしについて，７つの文化（パプア・ニューギニアのロッセル島，インドネシア のバリ，ペルー，メキシコのツェルタル・マヤ，カナダの英語話者，インド，日本の京都）において，半自然状況における標準化された課題を用いて比較研究を行った．その結果，いずれの文化においても10-14ヶ月児とその養育者は，同じような状況において同じような頻度で指さしを行っていることが確認された．ここから示唆される身ぶりの普遍性は，後の文化的に多様な言語的コミュニケーションの基盤となっていると考えられる．

(7)南部アフリカの狩猟採集民として知られてきたサンの養育行動を特徴づける，頻繁で持続時間の短い授乳，ジムナスティック（乳児を膝の上で抱え上げ，立位を保持，あるいは上下運動させる一連の行動），歌／踊り活動について，共同的音楽性というパースペクティブ(Malloch & Trevarthen, 2009)から微視的な分析を行った．その結果，以下が示された．共同的音楽性は，相互行為の参与者が注意，姿勢，立場，感情を相互に調整することを促す．この過程で，参与者にはその場でその時に何をするべきで，何をするべきでないかが示される．それとともに子どもは相互行為において利用する資源，参照する枠組み，関与する人の範囲を広げていく．こうした構造は，社会／文化によってさまざまな形をとりうるとともにその社会における道徳性が育まれる基礎となると考えられる．

(8)日本の子どもと養育者が，「行為の指示(directive)」にまつわる相互行為のパターンをどのように形成していくのかを検討した．養育者が行為の指示を行った場合，子どもはしばしばその指示に従わないで，養育者の注意を引きつけるような発話を行う．これは会話に文化的に共有された道徳性を導入し，さらに会話のトピックが移行するきっかけとなる．一方，養育者は行為の指示を，その強さ(intensity)やその発話が行われる足場(footing)を変化させながら，繰り返し行うことが多い．とりわけ，後者の１タイプと特徴づけられる報告発話は，しばしば子どもの行為が「思いやり」のような文化的に共有された道徳性に合致する文脈を形成する．これは，相互理解を志向する会話の場の構造的な要請が，文化的に特徴的な道徳性を生み出す例だと考えられる．

これらの研究は，本研究の目的に沿いつつ，乳幼児の発達研究の成果と行為と意味についての研究を接合した好例といえよう．

またこれら以外にも，本研究の目的の達成に向けて，多くの研究成果があがってきている．具体的には，代表者および研究協力者は本プロジェクト開始から 2012 年 3 月までに 74 本の論文（うち査読付き論文 23 本），3 冊の図書をまとめている．また国内外での学会やシンポジウムで 103 件の発表を行った．このうち旅費等の助成を受けた招待講演は 26 件に上る．これらの学会やシンポジウムを主催する研究分野は，人類学，心理学，赤ちゃん学，言語学，社会学など多岐にわたる．これは，本研究が国内外の幅広い分野でその学術的価値を高く評価されていることを示している．さらに上記の発表には，本プロジェクトの一環として国内外の著名な研究者を招へいし，計 10 回にわたって開催した「責任の文化的形成セミナー」など，代表者が中心となって企画・運営したものが数多く含まれる．これは，代表者が自ら組織を率いて積極的に研究成果を発信していることを示している．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 74 件）

① Takada, A. (2012). Pre-verbal infant-caregiver interaction. In A. Duranti, E. Ochs, & B. B. Schieffelin (Eds.), *The handbook of language socialization*. Oxford: Blackwell (pp.56-80).（査読無）

② 高田 明 (2011). 転身の物語り：サン研究における「家族」再訪. *文化人類学*, **75**(4), 551-573.（査読有）

③ Takada, A. (2011). Language contact and social change in North-Central Namibia: Socialization via singing and dancing activities among the !Xun San. In O. Hieda, C. König & H. Nakagawa (Eds.), *Tokyo university of foreign studies: Studies in linguistics Vol.2, Geographical typology and linguistic areas: With special reference to Africa*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins (pp.251-267).（査読無）

④ Takada, A. (2010) Changes in developmental trends of caregiver-child interactions among the San: Evidence from the !Xun of Northern Namibia. *African Study Monographs, Supplementary Issue*, **40**, 155-177.（査読有）

⑤ 高田 明 (2010) 相互行為を支えるプラグマティックな制約：セントラル・カラ

ハリ・サンにおける模倣活動の連鎖組織. In 木村大治・中村美知夫・高梨克也(編), *インタラクションの境界と接続: サル・人・会話研究から*. 昭和堂 (pp.358-377). (査読無)

⑥ 高田 明 (2009) 赤ちゃんのエスノグラフィ: 乳児及び乳児ケアに関する民族誌的研究の新機軸. *心理学評論*, 52(1), 140-151. (査読無)

⑦ Takada, A. (2009) Recapturing space: Production of inter-subjectivity among the Central Kalahari San. *Journeys: The International Journal of Travel and Travel Writing*, 9(2), 114-137. (査読有)

⑧ Takada, A. (2008). Kinship and naming among the Ekoka !Xun. In S. Ermisch (Ed.), *Research in Khoisan studies, No.22, Khoisan languages and linguistics: Proceedings of the 2nd International Symposium, January 8-12, 2006, Riezlern/Kleinwalsertal*. Cologne, Germany: Rüdiger Köppe Verlag Köln (pp.303-322). (査読有)

〔学会発表〕(計 103 件)

① Takada, A. (招待セッション) (2012). Re-enacting birth: The spread of the chebama ritual among the G|ui and G||ana. Paper presented at *the 111th Annual meeting of American Anthropological Association*, San Francisco, November 14th-18th.

② Takada, A. & Endo, T. (大会委員会主催公募シンポジウム) (2012). Do me a favor: Object requests embedded in directive sequences in Japanese caregiver-child interactions. Paper presented at the symposium: *Object requests in six languages*, held in *Language, Culture and Mind V: Integrating Semiotics Resources in Communication and Creativity*, Universidade Catolica Portuguesa, CECC-FCH, Lisbon, Portugal, June 27-29 (27th June 2012).

③ Takada, A. (招待講演) (2012). Socializing practices and kin relationships among the !Xun of Ekoka. Paper presented at *the 50th Anniversary Conference of the Centre of African Studies, University of Edinburgh: CAS@50: Cutting Edges and Retrospectives*, University of Edinburgh, Scotland, June 6-8 (8th June 2012).

④ 高田 明 (招待講演) (2012). リズムの調整と道徳性：サンの養育者-子ども間相互行為における共同的音楽性. *早稲田大学応用脳科学研究所主催シンポジウム「母子の相互作用を科学する」*, 2012年3月28日, 早稲田大学.

⑤ Takada, A. (招待講演) (2011). Surname and inter-ethnic relationships of the Ekoka !Xun. Paper presented at *the 4th International Symposium on Khoisan Languages and Linguistics: The hunter-gatherer legacy of Khoisan-speaking peoples: in memory of Hans den Besten (1948-2010)*. Riezlern/Kleinwalsertal, Austria, July 10-14 (12th July 2011).

⑥ Takada, A. (招待講演) (2011). Sensing action sediments: Some features of directive sequences in Japanese caregiver-child interactions. Paper presented at *the JSLS invited symposium: Reconsidering "communicative competence": Findings and suggestions from fieldwork/empirical research, at 13th Annual meeting of the Japanese Society for Language Sciences*, Kansai University, Osaka, June 25-26 (25th June 2011).

⑦ 高田 明 (大会委員会主催公募シンポジウム) (2010) クン・サンにおける子ども文化と社会変容. *日本発達心理学会第21回大会*, 2010年3月28日, 神戸国際会議場.

⑧ Takada, A. (招待講演) (2009) Language contact and social change in North-Central Namibia: Their impact on child-group interaction among the !Xun. *The International Conference of the Global COE Program "Corpus-based Linguistics and Language Education": A Geographical Typology of African Languages jointly with an International Workshop on Khoisan Linguistics*, 14th May, 2009, Tokyo, Japan.

⑨ 高田 明 （大会準備委員会企画シンポジウム）(2009) 歌／踊りと社会化: クン・サンにおける子ども文化. *日本赤ちゃん学会第9回学術集会*, 2009年5月17日, 滋賀県立大学.

⑩ 高田 明 （招待講演）(2008) 文化学習再考. *ヒューマンインタラクションの研究と教育: 質的研究を中心に*, 2008年1月14日, 埼玉大学.

⑪ Takada, A. （招待講演）(2008) Kinship terminology and naming practices among the !Xun. *The 3rd International Symposium on Khoisan Languages and Linguistics: Khoisan Languages - an Endangered World*, 7th July 2008, Riezlern/Kleinwalsertal, Austria.

⑫ Takada, A. （招待講演）(2008) Re-enacting birth: The spread of the *chebama* ritual in the central Kalahari. *The International Conference: Ritual Dynamics and the Science of Ritual*, 2nd October 2008, Heidelberg, Germany.

〔図書〕(計３件)

① 木村大治・中村美知夫・高梨克也（研究協力者)(編)(2010) *インタラクションの境界と接続*. 昭和堂, 445頁.

〔その他〕
ホームページ等
http://www.cci.jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
高田　明（TAKADA AKIRA）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：70378826

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)国内研究協力者
嶋田　容子（SHIMADA YOHKO）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・研究員
研究者番号：60422903

川島　理恵（KAWASHIMA MICHIE）
日本学術振興会特別研究員・RPD
研究者番号：なし

高梨　克也（TAKANASHI KATSUYA）
京都大学・学術情報メディアセンター・研究員
研究者番号：30423049

高木　智世（TAKAGI TOMOYO）
筑波大学・人文社会科学研究科（系）・准教授
研究者番号：00361296

伊藤　詞子（ITO NORIKO）
京都大学・野生動物研究センター・研究員
研究者番号：60402749